

ACS (Acute Coronary Syndrome) で入院した患者の重症度によるストレス内容の比較

¹国家公務員共済組合連合会 横浜南共済病院、²国家公務員共済組合連合会 横浜南共済病院

鈴木 由香¹、藤原 恵利¹、林 敦子¹、北原 富美子¹、伝川 洋子¹、藤井 洋之²、西崎 光弘²

(目的) ACSの重症度による病状の受け止めや環境への感じ方の違いを調査し、比較する。(研究方法) 対象者は、ACSでPCI後、室内歩行が可能になった患者とした。データ収集は、B. Volicerの「Hospital Stress Rating Scale」を川口らが日本語版尺度にした入院生活のストレス場面の38項目と、箴持の文献を参考に作成した患者の心理12項目で質問紙調査を行った。分析方法は、前述の38項目のうち、川口らが明らかにした8つのストレス因子に関連する19項目、患者の心理12項目を用い、CPK:3200以上、かつEF:30%以下の患者を重症、その他は軽症とし結果を比較した。(結果) 同意を得られた13名のうち、有効回答は6名(重症3名・軽症3名)であった。患者のストレス内容の比較を行い以下のことがわかった。1) 重症者は、情報の欠如があり、疾患に対する恐怖や不安を感じていた 2) 重症者は、元の生活に戻れるかどうかについてストレスを感じていた 3) 物理・化学的環境への不安は、重症・軽症の両者にストレスとなっていた 4) 重症者、軽症者ともに自分自身を重症と感じていた 5) 軽症者は、安静制限や拘束感についてストレスを感じていた (結論) ACSの重症者と軽症者のストレス内容に大きな差異はなかった。しかし、重症に関わらず、自分自身を重症と考えており、精神的サポートが必要である。特に重症者ではお退院後の生活に不安を感じており更なる支援が必要である。